

【ポスターセッション】

防災キャンプから考える防災教育と教育的効果の検証

○ 城戸裕子 (愛知学院大学・会員番号 007440)

小佐々典靖 (浜松学院大学・会員番号 005937)

キーワード：防災キャンプ 教育の効果 学び

1. 研究目的

本研究の目的は、防災キャンプの体験から得た学生の証言(記述)を検証し、教育的効果を明らかにすることである。

本学では継続的に東日本大震災の被災地へのボランティアを行っている。被災地でのボランティア活動を通して、学生が見聞した事柄、体験は大きな学びといえる。

災害時は、人命の確保が優先され、また安全確保のために避難所が設置されることとなる。避難所の多くは公共施設、教育施設(学校)などが拠点となる。近い将来、東海地震の起こる確率も高いと推測される中、避難所運営や避難所での生活が予測されることを想定し、「そなえる」ことは、危機管理や緊急時取るべき自らの行動の指針となると考える。このことから2017年度の夏のボランティア活動において、M県での「防災キャンププログラム」を初めて取り入れる運びとなった。参加学生は、実際に震災が起こった土地において、リアルタイムで起こる事象に戸惑いながらも、次々と課せられるミッションに取り組んでいくことで「自らの命を自らで守る」という大きな学びを得た。

それらの学生の学びを通して避難所に指定されるであろう大学内において「防災キャンプ」を実施に至った。大学構内は慣れ親しんだなじみの場所であるが、ライフラインが停止した状況での疑似避難生活を余儀なくされることでの戸惑いが見られた。

学外と学内での異なる場所での防災キャンプを実施後、学生の語りや逐語録からそれらを検証し、その教育的効果を明らかにすることで、今後の防災教育に活かす一助としたい。

2. 研究の視点および方法

本研究では、震災地における防災キャンプと学内でのキャンプの実施から得られた学生の自記式質問紙での自由記述についてテキストマイニングを使用し、分析を行った。

学外防災キャンプは、平成29年8月18日から19日(参加学生男子8名、女子9名の17名、開催地M県M町)、学内防災キャンプは、平成30年2月27日から28日(参加学生男子4名うち2名は地域住民、女子7名の11名、開催地A大学構内)で開催した。

M県観光協会が提供する「防災キャンププログラム一泊二日」の行程を組んだ。学内でも同様のプログラムを採用し、実施をした。キャンプ最終に行われる振り返りの時間で記載した「ふりかえりシート」での自由記述を分析の対象とした。対象者は、防災キャンプ参加者の38名である。分析はテキストマイニングの手法を採用し、IBM SPSS Text

Analitics for Surveys を使用した。項目ごとの自由記述を文法的に可能な範囲の最小単位である形態素解析により、分かち書き処理を行った。単独で意味の解析ができないものを削除し、それらの類型化を行い、比較検討を行った。

3. 倫理的配慮

本研究においては、一般社団法人日本社会福祉学会研究倫理指針を遵守し、以下のように配慮を行った。防災キャンプ参加申込書においては、質問紙調査の実施、撮影した写真を公表する場合があること、回収後のデータ管理では質問紙設問に関しての個人情報保護、研究成果の公表、調査に関する問い合わせ等への対応、質問紙への調査拒否の場合、成績などへの不利益がないことを明記した。署名捺印の欄を設け、申込書の返還と共に確認した。署名捺印があるものについて研究協力に同意したと判断し、集計、分析の対象として取り扱った。

4. 研究結果

自由記述の項目は、7項目である。1.視察中の震災遭遇並びに学院会館への避難について、2.避難後、避難所の運営を体験した場面、3.日が沈み、あたりが暗くなる中、寝床やお手洗い、食事の準備等のミッションを行う場面、4.震災を体験した方々に避難所生活等、当時の状況についてお話を伺った場面、5.一日目の行程が終了。ライフラインが停止し、真っ暗な中で、出来ることが限られていたが、どのように過ごしたか、6.二日目、ご自身の住む町で被災した場合のシミュレーションを行った意見や感想、7.今回の体験を通じた最も心に残ったこと、今後のそなえの意識の変化等である。

被災地での防災キャンプにおいて、最も多い出現頻度の高かったものは「聞く」、「自分」、「家族」、「命」であった。学内キャンプでは、「準備」、「備え」、「大切」であった。

それぞれの出現言語に対応する原文を参照すると、学外防災キャンプ群は実際の被災地での体験であり、リアルな場所であることから自分の命を自分で守ること、キャンプの終了期間が示されていない中での実施であったことで離れた家族への想いが強く表れている記載が多かった。学内キャンプ群は、一泊二日である期間の提示があったことから制限時間での体験をするという意識があるためか、これから起こり得る災害に対しての「備え」を図る必要があるということの気づきの記載が多かった。

5. 考察

本研究では、防災キャンプから考える防災教育と教育的効果の検証を目的とした。被災地での開催は、リアリティの再現があり、見知らぬ土地での体験からも臨場感と緊張感があった。反面、学内での開催は有事の際の緊張感、リアリティの再現には限界があった。

しかしながら、ライフラインの停止や限られた資源の中で食事の提供、災害弱者、外国人、ペットへの支援を体験したことで、避難所を運営する上での優先順位の決定方法、役割分担の必要性を学んだことが示された。防災教育の選択肢として、体験型の防災キャンプを取り入れることは有効であるということも示唆された。